

高齢者施設実習において、看護学生が捉えた認知症高齢者との 関わり場面から得た学び

中澤 明美, 山下 菜穂子, 山田 ノリ子
了徳寺大学・健康科学部看護学科

要 旨

本研究は、本学看護学科3年次生が、高齢者施設実習において認知症高齢者との関わり場面から何を学び得たか、その内容を明らかにすることを目的とした。本学看護学科3年次生で高齢者施設実習終了後にグループで記載したレポートの「認知症高齢者との関わり場面」と「そこから学んだこと」の部分を取り出し記述データとして質的に分析した。結果、印象的だった関わり場面は、「何度も同じことの繰り返しや」、「その場その場で感情や行動が変化し対応に戸惑う」ことがある一方で、「指導者の適切な対応で利用者が納得した」場面など21の具体的場面が明らかになった。その場面から、「まずは対象を理解しようと聴く姿勢を持ち」、「繰り返しわかりやすく丁寧に伝えること」、「行動や言葉の裏にあるものを考える」など認知症高齢者との関わり方の基本を学んでいた。学内の講義での基礎知識を基に実際に認知症高齢者との関わりを通し学生自身が学び取った内容は、今後の認知症ケアに関する教育に活かせると考える。

キーワード：高齢者施設実習、認知症高齢者、看護学生、看護の関わり

What the nursing students learned from the activities with elderly dementia persons through the practice in elderly facilities

Akemi Nakazawa¹⁾, Naoko Yamashita¹⁾, Noriko Yamada¹⁾
Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to clarify what the third year students of the nursing department of our university learned from the activities with elderly dementia persons in elderly facilities practice. This study shows the result of qualitative analysis of “the activities with elderly dementia persons” and “what the student’s learned from the activities” from the student’s report after the practice in elderly facilities. The study analyzed and clarified 21 specific situations from the impressions of the students such as in situations. where: “the elderly dementia persons said the same thing repeatedly.” and “their emotions and behaviors changed.”

Keywords : elderly facilities practice, elderly dementia persons, nursing students, nurse's involvement

I. はじめに

我が国では急速に人口の高齢化が伸展している。平成28年には高齢化率27%を突破し、4人に1人が65歳以上の高齢者となっている¹⁾。人口の高齢化に伴う社会的課題の一つに、要介護高齢者と認知症高齢者の

増加がある。平成27年1月に厚生労働省から出された認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）によると、認知症の人の数は平成24年では462万人、65歳以上の高齢者の7人に1人と推定されている。さらに、認知症の予備軍といわれている軽度認知障害（MCI：mild cognitive impairment）者数は400万人ともいわれ、認知症の人の数は800万人を突破している。このような社会的背景をもとに認知症高齢者に対する看護の質の向上が求められており、看護基礎教育においても認知症ケアに関する教育の重要性が指摘されている。

看護基礎教育における認知症ケア教育に関しては、認知症模擬患者を導入した演習²⁾やコミュニケーション技術習得のための体験学習³⁾など様々な取組みが報告されている。しかし、認知症高齢者の症状とその対応は、その時その状況による違いや個人差があり認知症の学習を終えていても看護学生（以下、学生）は、教科書通りの関わりができないことが多い⁴⁾。高齢者看護学実習における先行研究では、学生が実習で関わった認知症高齢者に対する困難感に関する研究^{5) 6) 7)}やどのような感情や気持ちを抱いたかという報告がされている^{8) 9) 10)}。また、認知症高齢者を対象にした実習の学びの報告もある^{11) 12)}。しかし、臨地実習において学生は具体的に認知症高齢者とどの様に関わっているのだろうか、その関わり場面から何を学び得たか、という報告はみられなかった。そこで、学生が高齢者施設実習において認知症高齢者と実際どのような関わりをしているのか、そこから何を学び得たのか、その内容を具体的に明らかにすることで今後の認知症ケアに関する教育に活かせると考えた。

II. 研究目的

本研究は、本学看護学科3年次生が、高齢者施設実習において認知症高齢者との関わり場面とそこから何を学び得たか、その内容を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2. 協力者

本学看護学科3年次生で、高齢者施設実習（臨地実習）と学内実習を終えた学生のうち、研究の同意が得られた者70人である。

3. 高齢者看護学実習Ⅱ（以下、施設実習とする）の概要

1) 実習目的

加齢に伴う変化や健康障害により施設で生活する高齢者を理解し、よりよい生活支援に向けて必要な知識、技術、態度を修得する。

2) 実習方法

- ・実習単位は、1単位（45時間）。
- ・特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、介護付き有料老人ホーム、高齢者複合施設などの6か所の施設を使い、1グループ3～5人で実習する。

- ・施設の日課に沿って行動し、入所者の理解に努め、必要な援助を指導者と共に実施する。
- ・月曜日～金曜日の5日間のうち月曜日から木曜日が臨地実習、金曜日は学内実習である。
学内実習では、グループごとに指定の記録用紙（資料1）の内容に基づきワークをし、その結果を用紙に記載する。その後、全体発表・質疑応答による意見交換にて学びの共有化を図る。

4. 方法

1) データ収集期間

平成28年11月～平成29年2月までである。

2) 調査内容・方法

調査内容は、学内実習で学生が記載した記録用紙の[認知症高齢者との関わりやコミュニケーションを通して印象的だった場面]と[この場面から考えたことや学んだこと]の記載内容であり、学生が記述した内容をほぼそのまま記述データとした。（なお、一部言い回しが分かりにくい文章を意味内容は変えず分かりやすく表現した箇所がある。）認知症高齢者との関わり場面は、あくまでも学生が判断した場面であり関わった高齢者個々の認知症の種類や程度はわからない。

3) 分析方法

記述データを何度も精読し、①[認知症高齢者との関わりやコミュニケーションを通して印象的だった場面]の具体的な実際の場面を取り出し（小分類）、意味の類似性に基づき分類し（中分類）場面の種類を命名した。さらに、中分類の類似性と相違性を検討し場面を大分類化した。②[この場面から考えたことや学んだこと]の記述データから具体的な学びの内容を表現した文脈を切り取り（小分類）、①と同様に意味の類似性に基づき分類し命名した（中分類）。中分類の類似性と相違性を検討し学びの内容を分類した（大分類）。データの分類や命名に関しての検討は、高齢者看護を担当する教員複数名で実施した。

5. 倫理的配慮

本研究は、了徳寺大学生命倫理委員会の承認を得て行った（承認番号:2926）。研究協力は強制でないこと、個人は特定されないこと、科目成績評価は終了しており成績とは一切関係ないこと、結果は紀要などにて公表することなど口頭と文書で説明し同意を得た。

IV. 結果

1. 学生が捉えた印象的だった認知症高齢者との関わり場面

印象的だった認知症高齢者との関わり場面は、大きく2つ【指導者・スタッフの関わり方、援助方法を見て印象に残った場面】と【学生自身が認知症高齢者に関わり、援助をする中で印象に残った場面】に分類された。具体的な実際の場面は21場面であり、この21場面を類似性に注目しまとめた結果、8種類の場面（中分類）が抽出された。以下、実際の場面（小分類）は「」、場面の種類（中分類）は「」場面（大分類）は【】で説明する。詳細は、表1に示す。

【指導者・スタッフの関わり方、援助方法を見て印象に残った場面】は、「無気力で反応が乏しい利用者への食事介助」を[適切な介助により食事が進んだ]場面や「帰ると繰り返す入所者」や「確認してと何度

もいう利用者」へ[適切な対応によって利用者が納得した]場面、また学生が「いきなり怒られて戸惑っている」と適切なタイミングで[助け舟を出してもらい救われたと感じた]場面から構成された。もう一方【学生自身が認知症高齢者に関わり、援助をする中で印象に残った場面】は、「話が支離滅裂になり食事がはじめられない人」に[自分なりに食事介助を実践したがうまくいかなかった]場面や「30分ずっと同じ話をされ」たり「同じことを何度も聞かれたり」するなど[何度も同じことの繰り返しに戸惑う] また、[怒られて戸惑う]場面が含まれた。さらに、[同じ人でもその時その時、その場その場で感情や行動が変化し戸惑いながらも「話を聞くことで満足げ」だったり「話しかけると話ができた」りと[自らコミュニケーションを取ることができた]と感じた場面から構成された。

2. 認知症高齢者との関わり場面から学生が得た学び

学生の学びは、大きく2つ【認知症高齢者への対応方法・関わり方の基本を学ぶ】と【認知症そのものへの理解を深める】に分類された。具体的な学びの記述内容は33個あり（小分類）、意味内容の類似性に注目しまとめた結果、10個の学び（中分類）が抽出された。以下、学びの具体的な記述内容（小分類）は「
」で、その内容をまとめた中分類は[]、学びの大分類は【 】で説明する。
詳細は、表2に示す。

【認知症高齢者への対応方法・関わり方の基本を学ぶ】は、「何を訴えようとしているのか理解しよう」と向き合い「聞こうとする気持ち大切」と[まずは理解しようと聴く姿勢]を持つことを学んだ。次に説明は、「何度でも繰り返し説明し」たり「視線を合わせて説明し」「言葉だけでなく実際に見せたり丁寧に接する」など[繰り返し、わかりやすく丁寧に伝え]、[不安を除き安心感を与える対応]が大切だと関わり方の基本姿勢を学んだ。「帰りたいの訴えは何らかの不安感の表れ」「その言葉の裏にある気持ちは違う」と気づき[言葉や行動の裏にあるものを考え対応する]、[1人ひとり状態に合わせた細やかな対応]をすること、「言葉だけでなく触れることも大切」など[非言語的コミュニケーションの活用]や[正確に事実を伝えることの大切さ]などの対応方法・関わり方の基本を学んでいた。一方の【認知症そのものへの理解を深める】では、「昔の話はよく覚えているが、今話した直前のことは忘れる」ことがあり「初対面の人には敏感であったり」「負の感情は思い出しやすい」など[認知症の症状、特徴を理解する]ことができた。「人的環境が影響を与えBehavioral Psychological Symptoms of Dementia（以下、BPSD）につながる」など[BPSDの原因、誘因を考える]ことができ、なによりも[まず認知症を正しく知ること]の大切さを学んでいた。

V. 考 察

1. 学生が印象的に捉えた認知症高齢者との関わり場面が示唆すること

学生が捉えた印象的だった認知症高齢者との関わり場面は、「学生自身が関わり援助する中で印象的に感じた場面」と、「指導者やスタッフの関わり方を見て印象的に捉えた場面」に大別された。看護学生や看護師が認知症高齢者との関わりで抱く感情についてはいくつかの報告がある。西村らの報告では⁸⁾、認知症高齢者に看護学生が抱く感情には、予期しない言動に驚き、思いが通じないもどかしさを感じながらも受け入れてもらえて嬉しい、一緒にいて楽しいなどの肯定的感情も抱いていた。高野らは⁴⁾ 看護学生が認知症高齢者との関わり時に抱く感情として、同じことを何度も話し、理解不能な言動や易怒的な言動に対して、戸惑う、困る、難しい、悩む、驚くなどの感情があるとしている。杉田らは¹³⁾、一般病棟に勤務する看護師の抱く感情にも、認知症高齢者のやさしさに癒される、認知症患者の理解が深まると楽しい、

という肯定的感情がある反面、かかわり方がわからないし手間がかかるので困る、認知症患者の反応にイライラするや暴力や離棟が恐ろしいなどの否定的感情があることも明らかにしている。このように学生や看護師は、様々な感情を抱きながら認知症高齢者と関わっているが、それらは、今回抽出された印象的場面、[何度も同じことの繰り返しに戸惑う]、[怒られて戸惑う]、[その場その場で感情が変化し戸惑う]の場面でも同様の感情が働いていたと推測される。一方、このように戸惑いながらも、自ら話しかけると話ができた、「うん、うん」と聞くと満足げな様子がみられたなど自らコミュニケーションを取ることができたことが印象的と捉えていた。このように学生は、認知症高齢者にどう対応してよいか戸惑いながらも、何とか関わりを持ちたいと思い実習しているのだろう。そして、指導者やスタッフの関わり方や対応方法をつぶさに観察し、その観察の中から、無気力で反応のない高齢者が適切な食事介助で食事がすすみ、スタッフの適切な声掛けや対応で高齢者が納得する姿をみることは、学生にとって印象深い場面だったと思われる。さらに、自らどうしてよいか戸惑っているとき、指導者が適切に助け舟を出してくれたことは、何より印象深い場面として印象的だったと推察される。

印象的だった関わり場面を明らかにすることで、高齢者施設実習において学生は何に戸惑っているのか、指導者はその戸惑いに気づきどう支援しているのか、そして指導者やスタッフがどの様なロールモデルを示しているのか、が明らかになった。高齢者施設実習では、教員の実現場面での指導介入は少ない。今回の分析結果を実習施設の指導者やスタッフに伝えるなどの連携を深めることで学生の実習における学びを支えていくことができると考える。

2. 認知症高齢者との関わり場面から学生が得た学び

認知症高齢者との関わり場面から学生が得た学びは、「認知症高齢者への対応方法・関わり方の基本」と「認知症そのものへの理解を深める」ことの2つに大別された。認知症ケアについて学生が使用しているテキスト¹⁴⁾では、認知症高齢者とのコミュニケーションの基本として①大人の言葉を使う ②ゆっくり低く落ち着いた声の調子 ③簡単な言葉と短い文章を用いる ④静かな環境で ⑤非言語的コミュニケーションを用いる ⑥一度に複数のメッセージを盛り込まない ⑦伝わらない場合は言いかえてみる ⑧時間をかけて聞き、待つ ⑨軽く触れる、アイコンタクトを持続する ⑩昔話を引き出す、と記載されている。学生が実際に記載した具体的な記述データを見ると「何度でも繰り返し説明する」「説明が長いとわからなくなる(短文でわかりやすく)」「目線を合わせて説明する」「言葉だけでなく触れることも大切」「非言語的コミュニケーションを取り入れる」「笑顔で対応する」「不穏状態のときは落ち着くのを待つ、見守る」「聞こうとする気持ちが大切」などが挙げられ、テキストと同様の内容について実践を通して実際に学んでいることがわかった。

福岡らは¹¹⁾ 認知症グループホーム実習での学生の学びとして「認知症の方との接し方の理解」「認知症の症状の理解」「個別性の看護」「医療機関連携」の4つをあげている。道繁らも¹²⁾ 介護老人保健施設とグループホームでの学生の学びを分析し「環境を整える」「生活援助」「コミュニケーション」「医療従事者としての態度」「看護職が配置されることの意味」などを明らかにしている。今回の分析では、実習における認知症高齢者との印象的だった関わり場面から得た学びを抽出したため、先行研究に示された「医療機関連携」「環境調整」「看護職が配置されることの意味」については抽出されなかった。しかし、「まずは理解しようと聴く姿勢」をもち「繰り返し、わかりやすく丁寧に伝える」努力をすることや「不安を除き安心感を与える対応」を心掛け「言葉や行動の裏にあるものを考え対応する」など認知症高齢者への対応方法・関わ

り方の基本を再確認しながらBPSDの原因、誘因を考えること、そして何よりもまずは認知症そのものを正しく知り理解を深めることの大切さを学んでいたことは、高齢者施設実習での大きな成果といえる。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究は、高齢者施設で実習し認知症高齢者との関わり場面から看護学生が何を学び取っていったかを明らかにしたが、このような場面ではこのような学びが得られる、という視点での分析ができていない点は、限界といえる。今後の分析方法の課題としたい。例えば、このような場面ではこのようなことを学び取ることができるということが明らかになれば、学内での演習授業に活かせるだろう。認知症ケアをどう学生に教授するかは高齢者看護教育にとって大きな課題である。中原ら²⁾は、模擬患者を使った認知症ケア演習を実施し、学生が高齢者と接するときの態度やコミュニケーションの工夫、環境づくりなどの学びを得ている。実際に学生が臨床の場で遭遇するだろう認知症高齢者との関わり場面を教材化し、よりリアリティーのある授業につなげることも今後の課題である。

さらに、今回は認知症ではない一般高齢者との関わりから学生が何を学ぶ取なのか、その違いを比較した研究ではないためそこは明らかになっていない点が限界である。

VI. 結論

学生が高齢者施設実習において、印象的だった認知症高齢者との関わり場面は、①スタッフの適切な介助や声掛けにより利用者が良い方向に変化した場面 ②学生自身がどうかかわってよいか戸惑っている時にスタッフに助け舟を出してもらい救われたと感じた場面 ③学生なりに対応したが上手くいかなかった場面 ④逆に上手く関わられた場面 が挙げられた。

認知症高齢者との関わり場面を通して学生が得た学びは、①まずは、理解しようと聴く姿勢で接し、認知症高齢者の言動の裏にあるものを考え、わかりやすく丁寧に伝えることや安心感を与える対応など、認知症高齢者への対応の基本 ②BPSDの原因、誘因を考え認知症のそのものへの理解を深めることの重要性が明らかになった。

謝辞

本論文をまとめるにあたりレポートの提供にご協力下さった学生の皆様、学生の実習を快く受けて下さっている高齢者施設の皆様に心から感謝いたします。

表1 学生が捉えた印象的だった認知症高齢者との関わり場面

場面(大分類)	場面の種類(中分類)	具体的な実際の場面(小分類)
指導者、スタッフの関わり方、援助方法を見て印象に残った場面	適切な食事介助により食事が進んだ(場面)	無気力で反応の乏しい利用者への食事介助場面、すぐに口に運ぶのではなく①においをかいでもらう②メニューを紹介し何を食べるのか理解を得る③最初は三角食べで好みを把握する④好きなものをはさんで食べるように介助する
	適切な声掛けや対応で利用者が納得した(場面)	「帰る」と繰り返す入所者に言動を否定するのではなく「急に帰ると奥さんもびっくりしますよ」などと対応していた 「迎えにくるはずだから確認して…」と何でもいう利用者に電話をかける動作をして対応していた 「トイレに行かせてください」との訴えに「さっき行ったでしょう」と否定せず「これが終わったら…」と具体的に説明して納得された
	助け舟を出してもらい救われたと感じた(場面)	お寿司レクがあったことを翌日には忘れていたが、スタッフの声掛けで「ウニが入っていなかった」と思い出した 更衣の場面「ベルトを外してシャツをズボンに入れましょう」と説明すると手が止まることができなかった、介護士はベルト、シャツと単語で伝えて一緒に動作して行っていた
	自分なりに食事介助を实践したがうまくいかなかった(場面)	いきなり怒られて恐怖心を抱いたが、看護師長より性格ではなく脳が変性したことによる症状の一つと教えて頂き理解が深まった 怒られて戸惑っていると介護士さんが「学生さんはAさんのことが知りたいのよ」と利用者さんへ声をかけてくれた
学生自身が認知症高齢者に関わり、援助をする中で印象に残った場面	怒られて戸惑った(場面)	誤嚥なく食事できる人だったが、話が支離滅裂になり食事ははじめられない、スプーンを口に近づけたりご飯に気持ちは行くように声をかけたりしたがうまく行かなかった 「なぜあの人は席にいないの？」と同じことを何度も聞かれたり、何度も同じことを繰り返す人への対応に戸惑う
	何度も同じことの繰り返しへの対応に戸惑う(場面)	30分ずっと同じ話をされ、違う話題をだしてもすぐに元の話に戻ってしまう 「帰りたい」という人が多く対応に困り返答できなかった 「友達が連れ去られた…」など何度も同じ話を繰り返し対応に困った
	同じ人でもその時その時、その場その場で感情や行動が変化し戸惑った(場面)	配膳時、「なぜお前がしてるんだ…」と怒られて怖かった 利用者さんとの対話時に「あなた変な質問ばかりするわね…」と言われ怒らせてしまった 1日目は「帰れ！」と言われたが2日目は「なんであなたいるの？」と聞かれ実習ですと対応すると「あーそうか」と納得された 入浴後の着替えで「おむつはきますね」と話しかけただけに泣き出した、でもすぐに泣き止んだ
	自らコミュニケーションを取ることができた(場面)	「靴を脱いでください」と説明し「靴」「脱ぐ」と実演したができなかった、でもその後、自室に戻るとすぐにできた 1日目の配膳では怒られた、2日目の配膳では穏やかに「ありがとう」と言われた 話しのつじつまが合わないが否定せず、「うん、うん」と聞くと満足げな様子がみられた 学生から話かけると話げができた、話は続かなかったが話しかけても意味ないと思っていた自分に気づけた

表2 認知症高齢者との関わり場面から学生が得た学び

大分類	中分類	具体的記述内容(小分類)
認知症高齢者への対応方法・関わり方の基本を学ぶ	繰り返し、わかりやすく丁寧に伝える	声をかけ続ける 何度でも繰り返し説明する 説明がながいとわからなくなる 目線を合わせて説明する 言葉で説明するだけでなく実際に見せるなど丁寧に接する 物を見せながら説明する、一緒にやってみるなど丁寧に伝えることが大切
	まずは理解しようと聴く姿勢	不安感を強めないように話を聴く 何を訴えようとしているのか理解しようと向き合うことが大切 聞こうとする気持ち(表情、声のトーン、雰囲気など)が大切
	不安を除き安心感を与える対応	否定的態度でなく笑顔で対応する 心配している気持ちを伝える 訴えを否定しないで安心感を与える 笑顔で肯定的に接する
	1人ひとり状態に合わせた細やかな対応	乱暴な言葉遣い、乱暴な態度は人権侵害にもつながる 反応がなくても介助者が焦ったり、焦らせたりすることなくその人のペースに合わせる 食事を1つのプレートにまとめる、スプーンを持ってもらう、口元に運んでもらうなど食事に集中する工夫 認知症の人は「忘れてしまうから」と考えて接するのではなく細やかな対応などその人の尊厳を大切にしたい 不穏状態の時は落ち着くのを待つ、見守る すぐ忘れるからと雑に接するのではなくスタッフは1人ひとりの方に向き合って接していた
	言葉や行動の裏にあるものを考え対応する	「帰りたい」の訴えは何らかの不安感の表れと捉え安心できる居場所を作ってあげる 同じ言葉でもその裏にある気持ちは違うので一人一人に合わせて対応をする
	非言語的コミュニケーションの活用	なぜできたのか、できなかったのか、その場その場でアセスメントすることが大切 言葉だけでなく触れることも大切 非言語的コミュニケーションを取り入れる 全て肯定するのではなく正確なことを伝える
	正確に事実を伝えることの大切さ	薬や食事などは間違っていることは間違っていると事実を伝える
	認知症の症状、特徴を理解する	昔の話はよく覚えているが、今話した直前のことは忘れることがあると分かった 些細なことでも感情的になる、同じことを何度も繰り返すなど認知症の特徴を学んだ 認知症の人は初対面の人に対して敏感になっている可能性がある
	認知症そのものへの理解を深める	認知症の方は、つらかったことなど負の感情が動いたときの気持ちは思い出しやすいと感じた
		BPSDの原因、誘因を考える
	まず認知症を正しく知ること	認知症そのものの理解を深めてから状態を見極めることが大事

資料1

高齢者看護学実習Ⅱ 学内実習のまとめ 実習時期【 1 2 3 4 】ケール目

実習メンバー(名前) 発表者に○
実習場所 施設の種類に○
施設名: (特別養護老人ホーム 介護老人保健施設 介護付き有料老人ホーム 複合型介護老人施設) 施設紹介(施設の理念・特徴 入所者の概要 スタッフ構成 ケアの実態 など)
実習中、印象的だった場面や出来事 (この場面を取り上げた理由とこの場面から学んだことや考えたこと含めて)

認知症高齢者との関わりやコミュニケーションを通して印象的だった場面
なぜ、この場面を取り上げたのか
この場面から考えたことや学んだこと
高齢者施設実習全体を通して学んだこと(社会資源としての高齢者施設、施設看護で大切なこと、看護師の役割など)

文献

- 1) 一般財団法人 厚生労働統計協会 国民の福祉と介護の動向2017/2018年. 64 (10) 172, 177-178.
- 2) 中原順子, 佐野望, 野田陽子他 (2014) 高齢者看護学教育における認知症模擬患者を導入した演習での学び. 共立女子大学看護学雑誌. 1, 17-24.
- 3) 橋本智江, 小泉由美, 岩本陽子他 (2017) 認知症高齢者理解とコミュニケーション技術習得のための体験演習における看護学生の学び. 日本認知症ケア学会誌. 15 (4), 848-856.
- 4) 高野真由美, 松本佳子 (2016) 老年看護学実習 I で看護学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ち. 川崎市立看護短期大学紀要. 21 (1), 31-38.
- 5) 千葉京子, 草地潤子 (2006) 介護老人保健施設における認知症高齢者との関わりで看護学生が対応困難となる場面の特性. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要. 19, 9-16.
- 6) 古市清美他 (2012) 認知症高齢者とのコミュニケーションにおける看護学生の困難感を抱いた場面. 日本看護学会論文集. 看護総合. 42, 362-365.
- 7) 嶋田美香他 (2007) 学生が認知症高齢者と接するときを感じる困難感の内容とその対処行動. 九州国立看護教育紀要. 9 (1), 8-14.
- 8) 西村美里, 大町弥生, 中山由美 (2008) 認知症高齢者に看護学生が抱いた感情. 藍野学院紀要. 22, 12-21.
- 9) 山本夏海, 中島洋子 (2007) 看護学生の認知症高齢者に対する認識と受容感情－実習での受け持ち有無による比較－. 第37回日本看護学会論文集老年看護, 112-113.
- 10) 榎本明子他 (2008) 看護学生の認知症高齢者との関係－印象に残っている場面での気持ちに焦点をあてて－. 川崎市立看護短期大学紀要. 28, 39-45.
- 11) 福岡真理, 小楠範子, 木村孝子 (2013) 認知症対応型グループホーム実習における看護学生の学びの実態. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要. 17, 43-48.
- 12) 道繁祐紀恵, 奥山真由美, 甲谷愛子他 (2014) 介護老人保健施設およびグループホームにおける認知症高齢者に対する看護学生の学び. 山陽論叢. 21, 43-53.
- 13) 杉田恵美, 西片久美子 (2013) 一般病棟に勤務する看護師が認知症高齢者との関わりで抱く感情. 日赤看会誌. 13 (1), 29-34.
- 14) 北川公子, 井出訓, 植田恵 (2017) 専門分野Ⅱ老年看護学, 医学書院, 東京. 318.